

【地域教育実践報告】

埼玉県東秩父村における教育実践報告①

——中山間「ふるさと支援隊」の活動を中心として——

三國信夫*

キーワード：消滅可能性自治体、ふるさと支援隊、東秩父村、ディプロマポリシー、協創力

1. はじめに

本稿は、埼玉県東秩父村にて実践された、経営学部3年生および短期大学1年生におけるゼミナール活動について報告するものである。

特に、2024年度から、経営学部3年生のゼミナールの活動が埼玉県中山間「ふるさと支援隊」として正式に採択されたことから、この活動を中心とした報告を行いたい。

東秩父村は、埼玉県北西部の秩父郡に属する、埼玉県内唯一の村である。古くから「和紙の里」として知られる一方で、少子高齢化および人口減少が進み、消滅可能性自治体に選ばれてしまうなど、村としての活力を失うことや、村の存続そのものを心配する声も上がっている。

このような危機に直面した東秩父村をフィールドとして、村の実情について深く学ぶこと、さらには村の魅力を学生たち自身の手であらためて探し出すこと、この2つを大きな目標に掲げてゼミナール活動を行った。経営学部3年生のゼミナールでは、さらに、自分たちで見つけ出した村の魅力について、さまざまなメディアを活用して広く内外に知らせる活動にも取り組んだ。

以上の2024年度に実施された（一部は年度内に実施予定の）活動について、まずは経営学部3年生ゼミナール、続いて短期大学1年生ゼミナールの順で報告する。

2. 埼玉県中山間「ふるさと支援隊」とは？

経営学部3年生ゼミナールが地域における活動を展開するにあたり、2024年度からは埼玉県中山間「ふるさと支援隊」として活動を始めている。この中山間「ふるさと支援隊」（以下、「ふるさと支援隊」と表記する）とはどのような事業であるのか、その事業に経営学部三國ゼミナールがどのような経緯で参加するようになったのかをまとめておきたい。

2.1 中山間地域に活力をもたらす活動の支援

埼玉県の中山間地域（農業地域類型区分のうち「中間農業地域」と「山間農業地域」を合わせた地域）においては、現在、高齢化や過疎化が進行することにより、農林業や地域活動の維持が困難になっている地域が増えている。このことから、埼玉県は、平成22年度（2010年度）から大学生による

* 城西短期大学ビジネス総合学科准教授

「ふるさと支援隊」を組織し、若い感性や専門知識を生かして中山間地域に活力をもたらす学生の活動の支援を行っている。令和5年度（2023年度）までに、延べ54のふるさと支援隊が集落の活性化に取り組んでいるという。

活動領域は、埼玉県内の表2.1にある市町村と地域である。「ふるさと支援隊」として活動を希望する大学のゼミナールは、活動地域を決定し、その地域における活動内容について活動計画書を作成し、審査会でプレゼンテーションを行うこととなっている。

審査に合格したゼミナールは、「ふるさと支援隊」としての活動を始める。年度毎の活動が基本であるが、審査に通れば継続して活動を実施することもできる（多くのゼミナールが複数年継続して活動が続いている）。

秋には活動報告及び交流会（中間報告会）があり、「ふるさと支援隊」として参加している各大学のゼミナールが集まって、それまでの活動内容をプレゼンテーションで報告する。さらに、その報告会に続いて交流会があり、各大学のメンバーがランダムにグループを作って与えられた課題についてディスカッションをし、グループごとに課題の解決策についてプレゼンテーションを行う。これは、大学の垣根を越えて「ふるさと支援隊」のメンバー同士の親睦を深めることを目的とした活動である。

実際に、2024年10月7日に参加したこの中間報告会をきっかけに、城西大学と立教大学の交流が始まった。立教大学のゼミナールの学生が東秩父村を訪れる際に、三國ゼミのメンバーが同行し、案内をする機会があった。さらには今後お互いの交流を深める予定であるという。

年度の終わりには、1年間の活動を報告する機会が与えられる（2024年度は、2025年2月に実施予定）。

市 町 村	地 域（大字等）
飯 能 市	原市場、下赤工、上赤工、赤沢、唐竹、中藤上郷、中藤中郷、中藤下郷、白子、平戸、虎秀、井上、長沢、南、坂石町分、坂石、吾野、上長沢、高山、北川、坂元、南川、上名栗、下名栗
越 生 町	津久根、上谷、堂山、小杉、大満、龍ヶ谷、黒山、麦原
小 川 町	腰越、青山、上古寺、下古寺、増尾、飯田、原川、笠原、鞆負、木部、勝呂、木呂子、西古里、鷹巣
鳩 山 町	大橋、奥田、須江、竹本、泉井、高野倉、熊井
秩 父 市	寺尾、蒔田、田村、久那、山田、栃谷、定峰、太田、伊古田、品沢、堀切、小柱、上影森、下影森、浦山、下吉田、阿熊、久長、上吉田、石間、太田部、大滝、中津川、三峰、久那、上田野、日野、小野原、白久、賛川
美 里 町	猪俣、白石、円良田
神 川 町	渡瀬、下阿久原、上阿久原、矢納
深 谷 市	二ツ小屋、前小屋
寄 居 町	折原、立原、秋山、三品、西ノ入
春日部市	西宝珠花、西親野井、塚崎
ときがわ町、横瀬町、皆野町、長瀬町、小鹿野町、東秩父村、本庄市の7市町村は、対象地域が「全域」	

表2.1 「ふるさと支援隊」の活動対象となる地域（埼玉県H.P.より、一部改変）

2.2 「ふるさと支援隊」参加の経緯

経営学部で三國ゼミナールでは、従来から地域と関わる活動を行ってきたが、学生の学びを深めるためにも、学生同士の「協創力」をより育むためにも、地域との協力体制を築き、継続的に活動を続けられる環境を必要としていた。そのような折に、地域連携センター事務室より「ふるさと支援隊」の活動を紹介されたため、応募して審査に挑戦することとした。

経営学部3年生のゼミナールは、4月にお互い初顔合わせしたばかりであったため、短期間で審査に向けて準備することは難しい面もあったが、幹事となった学生を中心に準備を進めた。また、前年度に「ふるさと支援隊」に応募して審査を受けた教員からの具体的なアドバイスも非常に有益で、効率的な準備を進めることができた。

審査会では、PowerPointによるプレゼンテーションと質疑応答があった。予算項目に関する質問と、活動に対する具体的なアドバイス¹があった。

市町村	対象集落	大学名	活動テーマ
秩父市・皆野町	秩父市中山間・皆野町全域	大妻女子大学	「ご当地カクテル」の開発を通じた、秩父地域及び特産品の知名度向上プロジェクト
ときがわ町	全域	大正大学	地元の魅力再発見のための情報発信と多世代交流型イベントの実施ーときがわ町の「内発的発展」を目指してー
小鹿野町	全域	立教大学	小鹿野町活性化～一泊二日滞在の実現～車中泊の普及・実施策
横瀬町	全域	立教大学	官学連携による共創拠点の形成
飯能市	原市場	駿河台大学	飯能の里山資源を活用したアウトドア・スポーツ・ツーリズムへの挑戦
横瀬町	全域	十文字学園女子大学	未来へつなぐ魅力ある郷育の開発
皆野町	日野沢・金沢	十文字学園女子大学	皆野町日野沢地区及び、金沢地区の魅力再発見ーポストコロナ時代における地域づくり検討ー
ときがわ町	大附	十文字学園女子大学	若者Z世代が好む柑橘製品の開発
鳩山町	須江・大橋・泉井	日本大学	地元農産品・観光資源による地域内活性化と都市部との人的交流推進

表2.2 令和5年度（2023年度）ふるさと支援隊（埼玉県H.P.より、一部改変）

3. 東秩父村を活動地域に選んだ理由

城西大学及び城西短期大学周辺には、学生が関わりを持つことを歓迎してくれる地域もたくさんあり、またその実績もたくさんある。そうしたなかで、ゼミナールの活動の対象地域として東秩父村を選択した理由をここに整理したい。

3.1 東秩父村が消滅可能性自治体であったこと

東秩父村は、消滅可能性自治体²に選ばれている。2050年までに、20代30代の女性の数が現在と比較して半減する地域が消滅可能性自治体とされている。将来の日本では、学生がどの地域で暮らすことになっても、その地域が少子高齢化、人口減少、コミュニティの形骸化等の課題を抱えることは予想される。そこで、学生であるうちに、地域の課題をいわば先取りで抱えている地域を対象に学ぶことは意義のあることであると捉え、坂戸キャンパスからのアクセスも考えて東秩父村を活動対象地域として選別した。また、課題を抱える地域であるからこそ、学生を受け入れてもらえるのではないかと考えたことも選択した理由となっている。

- 1 東秩父村の農作業（稲刈り）に参加する活動予定に関して、「（和紙が有名な東秩父村が対象なのだから）和紙の原料の収穫を手伝う作業をしたら良いのではないか」というアドバイスをいただいた。
- 2 民間の有識者グループ「人口戦略会議」が選定している。

3.2 ゼミナール卒業生が和紙職人見習いとして東秩父村で活動していたこと

ゼミナールの活動地域として東秩父村を選択した理由の一つが、卒業生の存在であった。市村太樹さんは、城西大学経営学部を2017年3月に卒業後、東秩父村が主催した「手すき和紙後継者育成研修」を3年間受講し、その後「和紙の里」職員に採用されている。地域の伝統を守る仕事に勤しむ市村さんの活躍を現役のゼミ生たちに知ってもらいたいという思いもあって、東秩父村を選択することを前向きに考えているところであった。また、市村さんがゼミナールに対して協力を惜しまないという気持ちを表明してくれており、地域活動の際に市村さんを頼りにできた面も大きかった。



図3.1 ゼミ卒業生の市村さん（写真中央、着帽）

3.2 東秩父村と城西大学が相互連携に関する基本協定を結んでいたこと

2024年1月31日、東秩父村と城西大学は、包括的な連携のもと、産業、文化、学術等の分野で相互に協力し、地域の発展と人材の育成に寄与することを目的とする基本協定を締結した。

学生の発想力や行動力を活用し、東秩父村の環境資源を活性化させること、また、東秩父村地域の人々との交流を通して、学生自身の成長を促すことが目指された。

地域活動において、対象地域の全面協力体制があるということは非常に心強く、また大学側からも東秩父村との連携活動が奨励されていることもあり、ゼミナールの活動地域として東秩父村を選択する大きな理由の一つとなった。

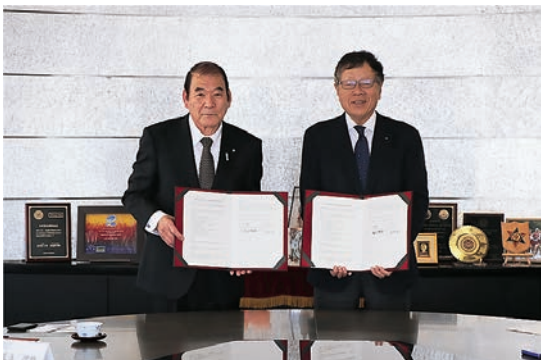


図3.2 包括基本協定の調印式に臨む足立理助村長（左、当時）と藤野陽三学長

(1) 地域の活性化及び産業の振興に関すること
(2) まちづくりに関すること
(3) 健康、食育、福祉の増進に関すること
(4) 環境の保全及び整備に関すること
(5) 教育、文化、生涯学習、スポーツの振興に関すること
(6) 人材の育成に関すること
(7) 学術研究に関すること
(8) 地域食材等を活かした食品開発・学術研究に関すること
(9) インターンシップ等の現地学習に関すること
(10) 施設の利用に関すること
(11) その他、両者が協議して必要と認める事項

表3.1 基本協定の内容（城西大学H.P.より）

4. 「ふるさと支援隊」の活動内容——経営学部3年生のゼミナール活動——

2024年度、「ふるさと支援隊」に初挑戦した経営学部3年生三國ゼミナールのメンバーは、2024年5月21日に、埼玉県農林部農業ビジネス支援課による審査を受けた。PowerPointによるプレゼンテーションとその後の質疑応答による審査であった。

三國ゼミナールの活動目標は、「東秩父村の魅力
を再発見し、発信する」ことであり、学生自身が東
秩父村に足を運び、学生ならではの目線でその魅力
を発見し、さまざまなメディアを通して発信するこ
とを目指すとアピールをした。

2024年5月29日に、埼玉県農業ビジネス支援課より、審査に合格したことが伝えられた。「ふるさと支援隊」の活動は、1年ごとに審査を受けなければならない、毎年の活動内容がとても重要となる。2024年度の活動内容は、当初計画していたものと、当初は計画していなかったものの学生の発案で新たに取り組むことになった活動とがある。以下に、一つ一つの活動について説明をする。

4.1 「東秩父村通信」の発行

さまざまなメディアがあるなかで、学生がまず選択したのが紙を媒体とする情報発信であった。誰もが手軽に手に取ることができる、という紙媒体の魅力を、通信という形にして発行することとした。

「東秩父村通信」というタイトルで、毎号特集テーマを設定して、そのテーマに基づいて取材・執筆活動を行うこととなった。第1号は「大自然に囲まれた推しスポット」がテーマとなって、自然豊かな東秩父村の魅力を満喫できる場所の紹介を行った。取材は夏休み期間中に実施し、実際に村内を自動車で巡り、今までの観光案内にとらわれることなく学生自身の目でその魅力を探した。

2024年10月21日に発行した「東秩父村通信」第1号は、城西大学坂戸キャンパス、紀尾井町キャンパス、東秩父村役場、道の駅「和紙の里」、そのほか周辺自治体にも協力をしてもらい数部ずつ置かせてもらうこととなった。また、後述する高

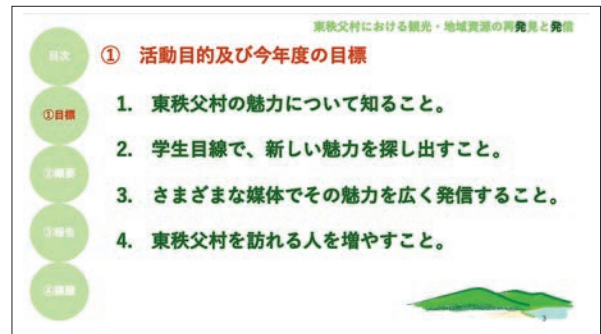


図 4.1 発表資料



図4.2 東秩父村通信第1号

麗祭においても、東秩父村の魅力を発信するコーナーにおいて配布した。

第2号は、これも後述する和田中学校の生徒からアイデアを募り、「東秩父村でやってみた・聞いてみた」をテーマとした。第3号は、「東秩父村で働く人々の魅力」をテーマとした。両号ともに、年末年始にゼミ生有志が東秩父村に行き、対面インタビューも含めた取材活動を行うこととなった。

4.2 SNSによる東秩父村の魅力発信

ソーシャルネットワークサービス（SNS）は、写真だけでなく動画によって魅力を発信できるだけでなく、リアルタイムで瞬時に情報発信できる点でも非常に魅力的なメディアである。しかも紙媒体とは異なり、印刷代などのコストもほとんど考慮する必要がない。

いくつかあるSNSのなかでも、学生が選択したのはInstagramであった。これは、学生が最も日常的に利用するメディアであること、情報発信のための作業が少なく（文章をまとめたり動画を編集したりする手間がない）、手軽に利用できる点が大きな理由となっている。

東秩父村の自然や観光名所の魅力を伝えるだけでなく、東秩父村の魅力を伝えようとするゼミナール活動の様子や授業風景も伝える情報として取り扱っている。

フォロワー数の目標は特に決めることなくアカウントの開設を行ったが、2025年1月5日時点でのフォロワー数は65人となっている。

また、情報発信に留まらず、Instagramのアカウントを通じて、東秩父村の魅力に関する情報がメッセージで送られてきたり、他大学のふるさと支援隊との情報共有を行えたり、メディアとしての活用も進んでいる。



図4.3 ゼミナールのInstagram

4.3 高麗祭への参加

城西大学及び城西短期大学の学園祭である高麗祭は、2024年11月3日及び4日に実施された。三國ゼミナールの3年生は、模擬店運営（肉巻きおにぎり）のほか、教室での展示活動も行った。

一つは、東秩父村の魅力を伝えるコーナーの設置である。学生が撮影した写真を掲示し、また、東秩父村通信第1号のほか、東秩父村の和紙を使った商品の展示などを行った。このコーナーにはゼミ生が常駐し、関心のある来場者に対して東秩父村の魅力や、東秩父村でのゼミ活動について説明を行うようにした。

さらに、三國ゼミナールの4年生の協力で、4年生の教室展示会場で「東秩父村を知るクイズ大会」を開催させてもらい、来場した子どもたちに東秩父村のことを知ってもらおうという活動をした。



図4.4 東秩父村の情報発信コーナー



図 4.5 オリジナル映画の上映会

そのほか、東秩父村を舞台にした映画（「追体験ホラー東秩父村 寂寥たる花園」）を制作し、上映する活動も行なった。この映画は、4年生が脚本を書き、出演、編集、上映全ての作業をしてくれるなど、全面的な協力をしてもらった。多くの来場者が映画を楽しんでくれたようで、「東秩父村に興味を持ちました」「東秩父村に行ってみたいと思いました」などの感想を残してくれる人もいた。



図 4.6 上映会ポスター

4.4 地域連携活動報告会への参加

毎年、高麗祭の時期に地域連携センターにより開催されている地域連携活動報告会に、経営学部3年生ゼミナールと、短期大学1年生基礎ゼミナールの2団体で参加した。

パネルに活動内容をまとめ、来場者に交代で常駐したゼミ生が説明を行った。東秩父村の魅力を伝えるとともに、村が抱える課題や、ゼミナール活動の詳細についても報告を行った。

地域の方が立ちどまり、ゼミ生の説明に耳を傾けてくださった。ゼミ生も説明をすることで、自分たちの活動を客観的に見つめ直すことができているようであった。「東秩父村の魅力が伝わりました」「地域のことをよく考えていて、素晴らしいです」「村の方との対話を基にしたことも聞けるとさによいと思います」「説明がとてもわかりやすく、丁寧で好感が持てました。SNSでの発信で若い人にも興味を持ってもらえそうですね！」「和紙は日本文化として大切なものだと思うので、無くなるのは嫌だと思っていました」「娘が小四のとき二分の一成人式で、東秩父村に紙をすきにいき、手形と感謝のメッセージをかいてプレゼントしてくれました。それで、かみのまちであることをしりました。身近すぎて目がいけない地元埼玉の魅力を果たしてもらい、次の休みにどこ行こうとまよったら、



図 4.7 藤野陽三学長に説明するゼミ生

東秩父村に行ってみたいね、と子どもたちとはなしました」「地元の子供達への取り組みは素晴らしいと思いました。ぜひ継続してみてください」などの長短さまざまな感想が参加者から寄せられた。



図 4. 8 地域連携報告会用のパネル（経営学部 3 年生ゼミナール）

4. 5 杉並区和田中学校総合学習「よのなか科」における出張授業



図 4. 9 和田中学校における授業風景

学外での活動も実施した。2024年12月7日、東京都杉並区立和田中学校で、経営学部3年ゼミ生6名が、「ふるさと支援隊」の活動についての授業を行った。

『「消滅可能性自治体を救え！」～経営学部三國ゼミの挑戦！～』というタイトルで、「ふるさと支援隊」として東秩父村の魅力を発信するゼミ活動について、50分間、スライドを使って発表した。

当日は、和田中学校の体育館に、中学1年生から3年生までの全校生徒約200名と和田中学校の先生方、保護者、そして今回の授業をさまざまな形で支援する和田中学校地域本部のスタッフが集まった。事前に十分な準備をしてきたとはいえ、体育館を埋めた生徒の数に圧倒され、いつも以上に緊張した様子を見せるゼミ生も多かった。

城西大学の学校紹介、杉並区とそれほど離れていない地域にも消滅可能性自治体があること、大学

と自治体が連携して課題解決に取り組んでいる現状やその背景、東秩父村で三國ゼミナールが取り組んでいる具体的な情報発信活動などについて、教員と学生のやりとりや東秩父村に関するクイズを交えながら中学生に伝えた。

「昨年度、東秩父村で生まれた子どもの数は？」「東秩父村の名産品は？」など、東秩父村が抱える現実や、まだ知られていないたくさんの魅力についての問いかけに、中学生たちは必死に回答を考えていた。また、その後の説明にはメモをとりながら熱心に耳を傾けてくれた。

和田中学校の全校で取り組む総合的な学習の時間「よのなか科」は、2003年度から始まった同校を象徴する授業プログラムである。今年度は、WADA Well-Being Project「和田地域の活性化のためのCM制作」をテーマに取り組んでおり、生徒たちは地域学習に高い関心を持っていた。

授業を聞いた生徒たちは、「初めて、大学が地域の課題について活動していることを知った」「スライドも見やすく、お話もわかりやすく、聞いていて楽しかった」「東秩父村の魅力が伝わった」「考えるだけでなく実際に行動するという、東秩父村に対する（ゼミ生の）思いが、とてもかっこいいと感じた」「（東秩父村の）ポピーの花を見に行ってみたいと思った」「僕も城西大学に入って、東秩父村との関わりを支えたいと思った」「少し城西大学に興味を持った」「城西大学経営学部三國ゼミナールに入って、東秩父村を救いたいと思った」「大学に行くのが楽しみになった」などの感想を寄せてくれた。

三國ゼミナールの学生たちも、熱心に受講してくれた生徒たちの姿勢に感動しただけでなく、授業後アンケートに書かれた生徒たちの意見やアイデアに大いに刺激を受けた。

このアンケートに、前述した「東秩父村通信」第2号のテーマに関するアイデアを募集したところ、大学生では思いつかないような斬新な回答も多くあり、そのいくつかの回答から実際に第2号のテーマを決定することとなった³。

4.6 訪日外国人旅行者へのPR活動（予定）

2025年1月13日に予定しているものとして、浅草周辺で、外国人旅行者に向けた「東秩父村の魅力を伝える」PR活動がある。

東秩父村の魅力についてSNSを通して広く発信したことで、投稿に対していくつか海外からの反応を得ることがあった。オーストラリアから、英語でメッセージを送ってくる人もいた。

海外にも広く東秩父村の魅力を伝えようとするのであれば、まず、日本国内に來ている旅行者に直接PRするのはどうだろうか、という声が上がリ、浅草でのイベントが企画されることとなった。

もともと、経営学部及び短期大学の三國ゼミナールでは、毎年、浅草や川越などに赴き、外国人旅行者にインタビューをす



図 4.10 浅草でのゼミ活動

3 「東秩父村通信」第2号を発行した際には、和田中学校に通信をお送りし、アイデアを多数寄せてくれた生徒にフィードバックを行う予定である。

る活動を長く続けてきた。ゼミナールで日本の観光について学ぶ際に、インバウンドの実態を調査することが主たる目的であった⁴。

そこで、2024年度は、従来のような調査ではなく、訪日外国人旅行者に東秩父村の魅力英語で説明し、日本滞在中に訪ねてもらうことを目標にPR活動をしてみようということになった。

ただ、ゼミ生の多くは英語に苦手意識があることから、PRのための素材を事前に準備しておこうということになり、東秩父村の観光案内を英語で準備することにした。

「東秩父村通信」の英語版とも言えるPRチラシには、東秩父村のイベント情報、カフェ情報、アクセス情報が簡単な英語で記載されている。このチラシを浅草で訪日外国人旅行者に配布しながら、口頭でさらに情報を伝える活動を予定している。この活動に関する報告は、来年度の地域教育実践報告の形式で行う予定である。



図 4.11 浅草で配布予定の英語版チラシ

4.7 農作業への参加

「ふるさと支援隊」の活動内容に関しては、それぞれのゼミナールが自由に設定することができるが、唯一、活動地域での農作業に参加して地元住民と交流を図ることが埼玉県から求められている。

東秩父村では、稲刈り体験と和紙の原料である楮の皮むき体験⁵を行うこととなっている。

稲刈り体験に関しては、2024年10月15日に実施した。地元の槻川小学校の児童とともに、ゼミ生が稲刈りに取り組んだ。



図 4.12 児童との稲刈り体験

楮の皮むき体験は、2025年1月6日実施予定である。この作業に参加するとともに、地元住民との交流を図り、2025年度以降の活動に関するヒントを得ようとすることも目的となっている。

-
- 4 ゼミ生同士の親睦を深めること、英語力を身につけること、前に踏み出す力を身につけること、などの複数の目的もあった。
- 5 審査の際にアドバイスされたことを、ゼミ生がすぐに活動に取り入れた。

5. 「ふるさと支援隊」次年度の展望——経営学部3年生のゼミナール活動——

2024年度の「ふるさと支援隊」としての活動は、慌ただしく始まったが、ゼミ生たちが主体的にゼミナール活動をリードしてくれたおかげで、当初予定以上の活動を行うことができた。可能であれば、2025年度以降も継続して活動を進めたいというのがゼミ生の一致した考えである。

一方で、活動をしたことで、浮かび上がってきた課題もあった。それを以下に整理して、次年度以降の活動に活かしたいと思う。

5.1 見えてきた2024年度の課題

2024年10月7日に開催された「ふるさと支援隊」の活動報告及び交流会（中間報告会）において、ゼミ生がそれまでの活動を振り返り、今後の活動を進めていく上での課題としたことについてここで記しておきたい。

5.1.1 東秩父村の魅力についての理解が不足している

東秩父村について学び始めて日が浅いこともあり、村の魅力について自分たちがまだ十分に理解していない（発見していない）というのが、ゼミ生の多くが認識している課題であった。

これを解決するには、東秩父村に通う頻度を上げる、村の人と交流する機会を増やす、等のアイデアが出された。

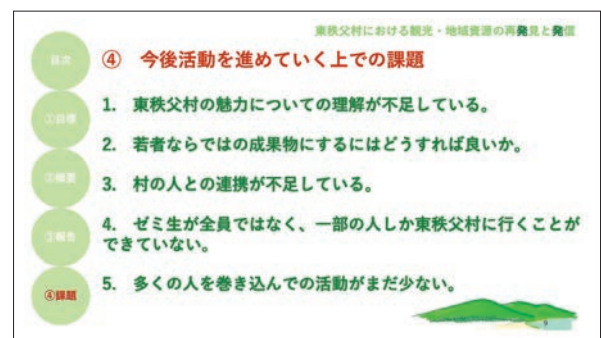


図5.1 中間報告会での発表資料

5.1.2 若者ならではの成果物にするにはどうすれば良いか

東秩父村の自然の魅力、和紙という伝統工芸品の魅力等は、誰にでもわかる魅力であり、「若者である大学生」にだからこそ発見される魅力とは言えないのではないかと、ということも課題として挙げられることであった。若者だからこそ発見される魅力とは何だろうか。自分たちの活動の目的を改めて問い直す必要をゼミ生たちは感じているようであった。

現在、明確な答えが得られているわけではないが、「自分たちの活動を特色づけるものは何だろうか」と問い続けながら活動を進めていく必要を感じているようである。

5.1.3 村の人との連携が不足している

東秩父村には、活動開始以降、メンバーに変動はあるもののゼミナールとしてのべ10回近く訪れていたが、東秩父村の住民との交流の機会は多くはなかった⁶。そこで、「東秩父村通信」第2号と第3

6 前述した農作業への参加やカフェでの取材活動などに限られていた。

号では、村の住民へのインタビューを中心とした取材活動を行うこととし、住民の考えを知り、また自分たちの活動への理解を得ることも目指すこととした。

さらには、ゼミ生と村の住民とが同じプロジェクトに取り組むなど、2025年度には新しい活動も考えることとした。

5.1.4 ゼミ生が全員ではなく、一部の人が東秩父村に行くことができていない

ゼミナールの活動は、ゼミ長を中心とした幹事6、7名のメンバーが主導して行なっている。この幹事メンバーは複数回東秩父村に通っている場合もあるが、一方でゼミ生の中にはまだ一度も東秩父村に行ったことがないメンバーも存在する。活動に対する意欲に濃淡があるのは「ふるさと支援隊」の活動に限ったものではないが、やはり淡いメンバーの意欲を濃くしていく必要は、ゼミナールの課題として幹事を中心に認識し始めている⁷。

浅草での活動にはレクリエーションの要素もあり、こうした「楽しい」活動をみんなで取り組むことでゼミナールの活動への意欲を増していくことが期待されている。

5.1.5 多くの人を巻き込んだ活動はまだ少ない

ゼミ生、東秩父村の住民以外にも、たとえば城西大学の学生、大学周辺の地域の人など、多くの人を巻き込むことでもっと東秩父村のことを広く知ってもらうことができるのではないかと、というのがゼミ生が認識している課題となっている。

これも新年度に取り組むべき課題であるが、12月に実施した和田中学校でのイベントなどは「多くの人を巻き込む」ための第一歩になっていると言えよう。

5.2 2025年度に向けた新しい活動



図5.2 次年度に向けてのすごろく作り

上記のような課題を共有しながら、さっそく2025年度に向けた新しい活動も始まっている。

一つは、東秩父村に関するボードゲームの制作である。ゼミナールを5つのグループに分けて、グループごとにボードゲームの制作を行った。このボードゲームは、東秩父村の唯一の小学校である槻川小学校の児童に遊んでもらいながら、児童の故郷である東秩父村のことを学んでもらう（魅力を知ってもらう）ことを目的として制作されている。例えば、あるグループのボードゲームは、和紙の制作過程がすごろくになっ

っており、ゲームを進めながら自然に和紙作りを体験できるゲームになっている。また、別のグループのボードゲームは、東秩父村を一周しながら観光資源について学べるゲームになっている。

⁷ メンバーの意欲の濃淡については、交流会においても各大学の共通課題として話題になっていた。

これらのゲームは、2025年度前期に完成させる予定で、そのあとはそのゲームを実際に槻川小学校の児童に遊んでもらうことを目標としている。先ほど課題として認識されていた「多くの人を巻き込む」活動になると考えられている。

以上のように、2024年度後期には、それまでの活動から解決すべき課題を抽出し、課題解決に向けた新しい活動も動き出している、というのが2025年1月時点での動向である。

6. ディプロマポリシーと地域学習——短期大学1年生のゼミ活動——

2024年度は、経営学部3年生ゼミナールと同じく、短期大学1年生ゼミナールでも、東秩父村を対象に地域学習を実施した。「考える力」「前に踏み出す力」「協力する力」という短期大学のディプロマポリシーとの関連を考えながら、短期大学1年生ゼミナールの活動を振り返りたい。

6.1 短期大学のディプロマポリシー

短期大学ビジネス総合学科のディプロマポリシーは、大きく「基本的学習成果」と「専門的学習成果」に分けられる。この「基本的学習成果」を形作るのが、「人間力」である。「人間力」は、「前に踏み出す力」「考える力」「協力する力」に分けられるが、これらは、2006年に経済産業省が提唱した「社会人基礎力」の「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」に対応して生み出されたものである。「社会人基礎力」とは、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を「社会人基礎力（＝3つの能力・12の能力要素）」として定義されたものである。

短期大学における基礎ゼミナール（1年生）及びゼミナール（2年生）は、共にコア科目（必修科目）に位置付けられており、短期大学における学習の基礎を築く場であるとされている。そこで、ゼミナールの活動を通してこの「人間力」をいかに身に付けるかが重要になってくることとなる。



図6.1 ディプロマポリシー（パンフレットより）

6.2 事前学習

経営学部3年生ゼミナールが東秩父村での活動を決めた同じ時期に、短期大学1年生ゼミナールでも地域学習を実施することを決定した。同じ地域を対象にすることで、経営学部ゼミナールと短期大学ゼミナールの交流も検討していたためである⁸。

短期大学では、まず、東秩父村に関する情報を、グループ学習の形態で収集する作業を行なった。東秩父村の位置、人口、自然、名産品、観光、仕事、医療、学校など、集められるだけの情報を集めて、全体で共有した。ディプロマポリシーの「協力する力」を意識した活動であった。

次に、収集された情報のなかで、各自が最も興味をもったテーマについて、より深く調べる学習を

8 短期大学ゼミナールの事前学習発表会に、経営学部ゼミナールの学生が参加して感想を述べてくれた。

	東秩父村に関するテーマ
1	無医村対策
2	保健センターの活動
3	教育委員会関係について
4	少人数を活かした特色ある教育
5	小学校の課外活動
6	住民主体の地域活性化事業
7	空き家活用
8	東秩父村と和紙
9	東秩父村の観光
10	東秩父村の財政

表 6.1 事前学習のテーマ



図 6.2 事前学習の発表

進めた。各自が「考える力」を発揮してもらう学習時間であった。

最後に、各自のテーマをPowerPointに整理しプレゼンテーションをしてゼミナール全体で情報を共有した。1年生であり、PowerPointの作成や人前での発表に苦手意識を持つ学生も多かったが、ゼミナール内で心理的安全性を確保した上で「前に踏み出す力」を意識して取り組んでもらった。

以上のような事前準備を終えて、いよいよ東秩父村での地域学習の日を迎えることとなった。

6.3 東秩父村での地域学習

2024年6月19日、短期大学1年生の三國ゼミナールは、同じく短期大学1年生の田淵ゼミナールとともに、東秩父村に向かった。

まず、「道の駅 和紙の里ひがしちちぶ」の和紙製造所で、紙漉き体験を行なった。ここで働く経営学部三國ゼミナールOBの市村さんから東秩父村における和紙の歴史や製造の過程について説明を受けたあと、短期大学の学生が一人ずつ紙漉き体験をした。

漉いた紙を乾燥させている間、道の駅の敷地内にある古民家を訪れた。そこでも市村さんがかつての村での生活の様子や古民家内での紙漉きの話をしてくださった。また、囲炉裏で沸かした麦茶をご馳走になり、昔の村人の生活に思いを馳せた。

その後、グループに分かれて昼食をとり、さらには和紙の里周辺を散策した。小高い丘に登

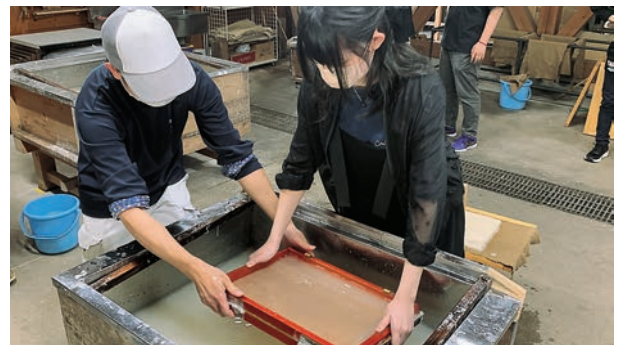


図 6.3 紙漉きの体験学習



図 6.4 古民家の見学

ったり、展望台から村全体を一望したり、和紙でできたお土産を買いに行ったり、グループごとに思い思いの時間を過ごした。

午後には、東秩父村役場に移動した。そこでは、村役場の職員の方が、東秩父村に関して学生が事前に用意した質問（図6.6参照）について、丁寧に回答してくださった。その回答に対して学生がさらに質問をするなど、活発な勉強会となった。



図6.5 村役場での勉強会

城西短期大学基礎ゼミナール（1年生）

東秩父村について特に興味を持っていること

学生が興味を持っていること、学生からの質問をまとめました。

- ・少人数の児童生徒を活かした特色ある教育の開発や充実
 - ★小中学校で、運動会や音楽祭などのイベントは行われていますか？
 - ★小・中学校や保育園の生徒の人数に対して先生はどのくらいですか？
 - ★学生の方は、バイトなどはどうしているのですか？
 - ★学校での日課で、東秩父ならではの特別な活動はありますか？
 - ★学習塾はあるのですか？受験生の受験対策はどのようにしているのですか？
- ・住民主体の地域活性化事業
 - ★学生や若者の参加はありますか？学生や若者が主催するイベントはありますか？
- ・無医村対策／保健衛生
 - ★保健センターで食生活改善や乳幼児のためのレシピが紹介されていますが、閲覧数はどのくらいなのでしょう。
- ・空き家活用
 - ★空き家に移住する人は、年間どのくらいいるのでしょうか？
 - ★現在の空き家の正確な数を知りたいです。
 - ★なぜ空き家バンクの登録物件数が少ないのですか？
 - ★観光に訪れた人のための宿泊施設はありますか？
- ・その他
 - ★地域おこし隊は、まだ活動しているのですか？どのくらいの頻度で活動しているのですか？成果はありましたか？どのくらいの人、どのような人が参加しているのですか？
 - ★東秩父の名産品は、現在どれくらいあるのでしょうか？
 - ★ゆるキャラは、わしのちゃん以外にもいますか？
 - ★東秩父の方は、どのような職業に就いているのでしょうか？
 - ★YouTubeの更新はもうしないのですか？

どうぞよろしくお願いします。

図6.6 学生からの質問

6.4 地域連携活動報告会への参加

高麗祭の時期に開催される地域連携活動報告会に、経営学部3年生ゼミナールとともに参加したことは先ほど述べたとおりである。

短期大学1年生のゼミ生も、ローテーションを組んで、2人ないし3人が常駐し、来場者に対して事前学習のことや東秩父村で体験したことを説明した。ゼミナール内でのプレゼンテーションと異なり、いつ誰が来るのかわからない状況で準備をし、見知らぬ来場客に対して説明することは難しい課題にも思えたが、皆が「前に踏み出す力」を発揮して、無事にイベントを終えることができた。



図6.7 地域連携報告会



図 6. 8 地域連携報告会用のパネル（短期大学 1 年生ゼミナール）

7. 終わりに

以上が、経営学部 3 年生ゼミナール及び短期大学 1 年生ゼミナールの、東秩父村における活動に関しての教育実践報告である。

2025 年度も、経営学部 3 年生ゼミナールが「ふるさと支援隊」として活動を継続させられるだけでなく、その活動内容をより充実させることができたかと考えている。ゼミ生全員の協創力を発揮していきたい。

大学が地域社会の発展に少しでも貢献すること、その一方で、地域社会との関わりを通して学生一人ひとりが少しでも成長していくこと、この双方を同時に達成できれば、地域連携の授業に携わる者としてこれ以上の喜びはないと考えている。